



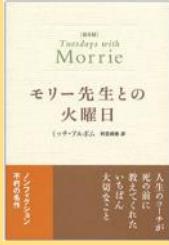
# 私の本棚



## 「モリー先生との火曜日 (原題:Tuesdays with Morrie)」

著者 Mitch Albom

出版社 NHK出版



### 「今日がこの世で最後の日だったらどうする？」

コロナで引きこもっているときに、突然日本の恩師から荷物が届きました。箱のなかには、日本の食材と一緒に本が何冊か。そのひとつが今回紹介する「モリー先生との火曜日」でした。

その日のうちにお酒を片手に読み始めてから、私にとって大切な一冊となりました。

ALS(筋萎縮性側索硬化症)と闘い、あと残り数ヶ月で人生を終えようとしているモリー先生。かつての教え子であった著者ミッチが毎週火曜日に先生のもとを訪れます。ミッチは失ってしまった大切な何かを取り戻すかのように、モリー先生と最後の瞬間まで対話を続けます。その実話を記したのがこの本です。大学卒業後、メディアの仕事で地位も名声もお金も得ていたミッチが先生の最後の授業で受け取ったものとは、いったいなにだったのでしょうか。

「今日が(死ぬ)その日？用意はいいか？するべきことをすべてやっているか？なりたいと思う人間になっているか？」

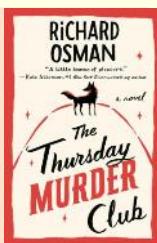
「いかに死ぬかを学べば、いかに生きるかも学べる。」

大学卒業以来会っていなかった教え子に会ったモリー先生は、彼の人生を見抜いていました。仕事を相棒にして、ほかのものはすべて脇へどけてきたミッチ。彼はモリー先生との対話の中で、少しずつ少しずつ変わっていきます。

## 「The Thursday Murder Club」

著者 Richard Osman

出版社 Pamela Dorman Books (米国版)



### おじいちゃんおばあちゃんが殺人事件の謎を追う、 痛快ミステリー

タイトルを直訳すると「木曜殺人クラブ」。それだけ聞くとまるで猟奇殺人鬼たちの集まりのようですが、その正体は高齢者居住施設の住人がワインを片手に過去の未解決事件についてあれこれ推理をするというもの。今度は一転、安楽椅子探偵ものの推理小説かと思いつや、施設の近くで本物の殺人事件が発生。木曜殺人クラブのじいちゃんばあちゃんが捜査に乗り出す中、第二の殺人事件が発生し、さらには謎の人骨まで出現して…。

The Thursday Murder Clubはイギリスの地方を舞台にした推理小説ですが、その特徴は何と言っても登場人物たちのアクの強さとバラエティー

普段の生活の中で、「死」について考えたり、向き合ったりすることは殆どありません。せいぜいニュースで誰かが亡くなったと聞いたり見たりするくらい。「死ぬ」ことを考える機会もヒマもないというのが本当のところ。

誰もがいつか「死ぬ」というのに、そこから目を逸らし、直視できません。

この本は、私たちが普段考えることができない「死」=「どう生きるか」について考える時間をくれます。「私の生き方、これでよかったの？」と少し立ち止まりたいときに手に取りたい、大切な本になりました。そして、この本に触れると人の温かさや愛の強さに触れることができます。

「死」や「どう生きるか」に向き合うなんて、少々難しく感じてしまいますが、この本に触れればモリー先生が語りかけてきます。

「誰か心を打ち明けられる人はいるかい？」

「あなたの愛する人たちに貢献してるかい？」

「そんな自分に満足してるかい？」

「精一杯人間らしく生きているかい？」

人々に実際に会うことが難しい状況下で、私の恩師はモリー先生を通じて大切なメッセージを届けてくれました。モリー先生の教える通り「遠くの友人(恩師)には手紙を出す」ことをやってみました。折に触れて何度も読み返したい一冊。ご自身のために、もしくはお子様と一緒に読んでみるのはいかがでしょうか？

(文責: 大加瀬 裕美)

図書館にも蔵書としてあります。  
またこの機会に原書で読んでみたり、  
映画で観るのもいかがでしょうか。



の豊かさ。強欲丸出しの土地開発業者に謎の多い神父、ロンドンから都落ち？してきた女性警官、寡黙な老学者、移民労働者たちなど、いかにも何かを秘めているようなキャラクターが続々登場して話を引っかけります。中でも木曜殺人クラブのメンバーである4人(全員70歳以上)は豊かな経験、築き上げたコネ、有り余る暇を総動員して、時には警察とすら渡り合います。何という行動力！

ですが、この話を単にキャラクターの濃さだけでこね上げたドタバタ喜劇だと思ってはいけません。山ほどばらまかれた偽の手がかりに翻弄されつつ、次第に浮かび上がってきた真相と対峙するとき、私たちは豊かに老いることの意味や、歳月と共に強くなる絆について深く考えさせられるでしょう。この物語が高齢者居住施設を舞台としているのは、決して作者の気まぐれや表面的なウケを狙ったものではないのです。

ちなみに作者のRichard Osman氏はテレビのパーソナリティーとして活躍しているそうで、ユーモアのセンスは本作でも存分に發揮されています。文章もこなれていて、これが小説家デビュー作とは信じられません。次回作にも期待です。

(文責: 鵜飼 信)

